

新型コロナと葬送

悲嘆吐露する機会を

3月以降、各寺院では法要の延期・中止が相次ぎ、葬儀も限られた参列者で執り行われている。先日、僧侶として私がつとめた葬儀では「こんな時期にすみません」と喪主が参列者に頭を下げていた。悲しみの中にある遺族が気を使わざるを得ない状況だ。そして、新型コロナウイルスで亡くなった人の葬儀では、遺族はより複雑な状況に置かれる。

3月以降、各寺院では法要の延期・中止が相次ぎ、葬儀も限られた参列者で執り行われている。先日、僧侶として私がつとめた葬儀では「こんな時期にすみません」と喪主が参列者に頭を下げていた。悲しみの中にある遺族が気を使わざるを得ない状況だ。そして、新型コロナウイルスで亡くなった人の葬儀では、遺族はより複雑な状況に置かれる。



通常は病院で納体袋に納められ、そのまま納棺。24時間以内の火葬が認められているため、早ければその日のうちに火葬される。感染予防のためとはいえ、遺族には受け入れがたいだろう。

おがわ・ゆうかん 1977年東京都生まれ。東京大学院博士課程単位取得退学。専門は宗教学。浄土宗蓮宝寺住職。葬送や医療、福祉関係者とつながる「ライフエンディング研究会」を主宰。

大正大地域構想研究所研究員 小川 有閑

うちには火葬される。感染予防のためとはいえ、遺族には受け入れがたいだろう。

遺族には、さまざまな悲嘆の感情が生じる。看病やみとりの記憶、葬送儀礼への参加には、死別の現実を受け入れ、悲嘆の痛みを消化する機能があるとされているが、新型コロナウイルスの場合、その機能が働かないのだ。なかなか死を受け入れられず、やり場のない怒りや後悔に襲われるかもしれない。

さらに、今、患者やその家族への偏見や差別が懸念されている。そのために心無い対応や腫物扱いされることで、遺族はより苦しまなければならない。身近な人はまずそ

遺族の心情に寄り添う

の悲しみに思いをいたし、遺族が安心して心情を吐露できる機会をつくってあげてほしい。

また、葬送業者の存在も忘れてはならない。ある葬儀社の社長は「もし新型コロナウイルスによる遺体搬送の依頼があったら、私が行くしかない。社員に感染リスクを負わせられない」と語っていた。感染した遺体を扱う不安は大きい。車両の消毒も必要となり、手間もかかる。しかし、遺族は大切な故人の肉体を託しているのだ。葬送業者の対応の良しあしは、癒やしにも傷にもなる。

社長は「遺族の悲しみに寄り添うのが使命だから、断ることはありえない」と語った。無事を願うとともに、その使命に敬意を表したい。

最後に宗教者だ。4月9日、私が所属する

浄土宗は、新型コロナウイルスによる死亡者の「法要等の執行にあたってのガイドライン」を公表した。遺骨になった後でも葬儀をつとめて極楽往生を念じ、遺族の心情に寄り添うことが求められている。

他の宗派、宗教にも通じるものだ。どんな亡くなり方であっても、故人が安らかであることを祈り、その平安を遺族に伝えるのは宗教者の役目だ。悲嘆を受け止め、故人との縁を紡ぎ直すよう、遺族とともに歩むことが望まれる。

感染拡大とともに、死亡者数の「数」に注目が集まる。しかしその「数」のひとつひとつには尊い命がある。その「数」の背後に、突然縁を断られた遺族や仲間、深い嘆きと苦しみがあることを、決して忘れてはならない。

視標

新型コロナ大流行